

磯淳の旧蔵書

久保尾 俊郎（特別資料室）

明治九年十月、福岡県秋月で起こった明治政府への不平分子の反乱に、主謀者の一人として参加した元秋月藩士磯淳(1827-1876)は、戦いに利あらず江川谷において自決した。磯はその際、妻に宛てた遺書の最後に、家の宝物として「古写本玉篇」「皇侃写本」の二点の蔵書を挙げた(『西南記伝』)。その前者が、現在早稲田大学図書館の貴重書庫に収蔵されている国宝『玉篇』巻第九、一卷である。磯の無念の死後『玉篇』は、家族から磯の師藤森天山の同門である川田甕江に保管を依頼され、川田の娘婿早稲田大学元教授杉山令吉の仲介で、明治三十九年、宮内大臣で蔵書家であった田中光顕に渡った。それが大正三年十一月に、田中伯から早稲田大学図書館に寄贈されたのである。この磯淳が所蔵した『玉篇』が早稲田大学図書館に帰した経緯については、受贈の時の図書館長市島謙吉が日記や随筆に詳しく記している(『雙魚堂日載』『早稲田大学の二大奇書』)。

初唐時代の写本である『玉篇』は、中国本土では早く散逸し、館蔵に帰したのは巻第九の断簡で、わが国に将来されたものの一部である。治安元年の識語を持つ紙背文書から平安京の寺院に蔵されていたと考えられ、江戸末期には京都の書肆銭屋惣四郎のもとにあった。文化三年六月、伊沢蘭軒がこれを目にしている(『長崎紀行』)。その『玉篇』を、明治維新後の元年から三年にかけて京都に出ていた磯淳のもとに、「ある一僧」が携帯してきたのを買、磯はその死まで八年ほど『玉篇』を所蔵していたことになる。

磯淳は文政十年秋月生れ、初名は信蔵。江戸に出て大橋訥庵、藤森天山の門に学び、業なって秋月に帰って藩校稽古館の教授となった。維新後、徴されて京都に出て大学校の助教となった。帰郷後は出仕せず、明治四年から九年にかけて家塾春風樓を開いて、秋月の乱に参加するまで旧藩の子弟の教育にあたった(『西南記伝』)。

○

筆者は、磯淳が死に際して挙げたもう一点の書物「皇侃写本」の行方を調べているうちに、他の磯旧蔵書がいくつかの図書館に現存することを知り、その所在を明ら

かにしたい気持ちになった。今日『新編蔵書印譜』のような著名な蔵書家の蔵書印を載せた印譜に、「秋月春風樓磯氏印」の磯淳の印を見出すことができる。春風樓は磯の斎号であったのであろうが、師藤森天山の号春雨樓にちなんだものと思われる。



『玉篇』巻第九

磯淳の旧蔵書は、地元へのこされたものでは、秋月郷土資料館の平陽文庫中に、『諸葛孔明伝注』、『宋名臣言行録』、『孔子家語』、『近思録』、『薛文清公從政名言』、『靖献遺言』など十一部がある、という報告がある(岡村繁「筑前秋月藩の漢学と教育」)。ただしこれには「浦泉磯」の印が押されているらしく、これらが磯淳旧蔵書なのか明らかではない。

「秋月春風樓磯氏印」の印を持つ磯淳の旧蔵書の多くは、今日、伊勢の神宮文庫と九州大学附属図書館の文庫群の中に見出すことができる。

神宮文庫の分は、元秋月藩士で磯の居宅のあった秋月鷹匠町生れの江藤正澄(1836-1911)の手に渡ったものである。江藤は磯より九歳若く、弘化三年、十一歳で稽古館に入門して四書五経をならったが、磯はその素読の師であった。江藤は勤皇の志士として維新前後の動乱に関与し、明治初年京都で磯に会い、磯の説諭で帰郷している。江藤は明治十年十一月、福岡箕子町に居をかまえ、東京・京都・大阪三都の間に集めた蔵書



東洋文庫蔵『論語集解』

一万五千巻を資本として古本屋を営んだ。秋月で磯が自決した翌年のことである（「江藤正澄略伝」「江藤正澄略伝草稿」）。

江藤正澄が磯淳の旧蔵書を手に入れた事情はわからないが、江藤は明治二十九年十二月に、伊勢徴古館へ生涯の収集品の大部分を奉納した。その凶書の多くが現在の神宮文庫に移管され、中に江藤正澄の所蔵を示す「江藤文庫」の印、磯の所蔵を示す「秋月春風樓磯氏印」の印をもった本が含まれているのである。現在筆者が知りえたのは、『翻刻論語』、『周易』（室町期写本）、『論語集解』（室町期写本）、『論語義疏』（室町期写本）、『爾雅』（南北朝期刊本）の五部である。しかし神宮文庫の漢籍を詳細に調査された長沢規矩也氏は、江藤文庫中に「秋月春風樓磯氏印」の朱文長方形印のある本が「往々ある」と記している（『神宮文庫漢籍善本解題』）。また江藤は、明治三十五年三月に、太宰府神社にも収集品を献納しており、江藤正澄識語本などにまじって金沢文庫旧蔵『孟子』一部の磯旧蔵本がある（『太宰府天満宮蔵書目録』）。

以上のほかに、九州大学附属図書館の磯と同時期を生きた学者・武士達の旧蔵書中にも、多数の「秋月春風樓磯氏印」が押印された凶書があることが、2009年3月に公開された「九州大学所蔵コレクション目録データベース」「九州大学蔵書印データベース」などによって知られる。

すなわち、福岡藩修猷館教授宗盛年（1824—1904、号逍遙）の逍遙文庫中に、『尚書日記』、『太玄経』、『易

経娘嬢』、『七経孟子考文補遺』、『春秋公羊註疏』、『春秋穀梁註疏』、『東萊呂先生左氏博議』、『王耕野先生讀書管見』（写本）、『経傳釈詞』、『周官精義』など二十八部。

平戸藩儒学者楠本碩水（1832—1916）の碩水文庫中に、『周禮』、『公羊禮説・公羊問答』、『融堂書解』の三部。

楠本碩水の縁戚にあたる平戸藩士近藤畏斎（1832—1916）の近藤文庫中に、『太極図説講義』（写本）、『讀小學記』（写本）、『社倉私議』の三部。

八女酒井田の漢学者樋口真幸（1835—1898）の樋口文庫中に、『皇清経解』一部がある。

これらの人々は磯淳と年齢が十歳は違わない、壮年期に幕末維新の激動期を生きた磯の故郷から遠くない地の人々である。このうち楠本碩水は京都に磯と同時期に出て、二人は交流しており（『碩水先生日記』）、最も多く磯の旧蔵書を持つ宗盛年は、明治三十五年の私立福岡図書館の設立に、江藤正澄とともに協力参加した人物である（筑紫豊「私立福岡図書館々史」）。

他に筆者が今までに知ることが出来た磯旧蔵本に、東洋文庫蔵『論語集解』、筑波大学中央図書館林泰輔旧蔵『天文版論語』、宮内庁書陵部蔵『慶長版論語集解』、弘文荘古版本目録『正平版論語』各一部がある。

○

以上挙げてきた書物だけでは磯淳旧蔵書の全貌が見えたとはいえないが、磯淳の蔵書は、藩校稽古館教授であり私塾春風樓の主であった人物にふさわしく、経書を中心にした唐本が多かった。中には古写本、古版本の稀書にあたる本も含まれている。そして、いくらかでも旧蔵書の所在があきらかになり、しっかりと保管されていることを確認できることは、死を迎えるに際して、家の宝として『玉篇』という書物を挙げるほどの愛書家であった磯淳の、無念の思いの一端を晴らすことになると思われる。

《参考文献》

筑紫豊「江藤正澄の面影」、秋月郷土資料館、昭和44年。
山根泰志「忘れられた文庫たち—中央図書館所蔵幕末明治期漢学者旧蔵書群—」（九州大学附属図書館研究開発室年報2008/2009）、2009年、所収。